

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成29年は14万5千トンとなりました。

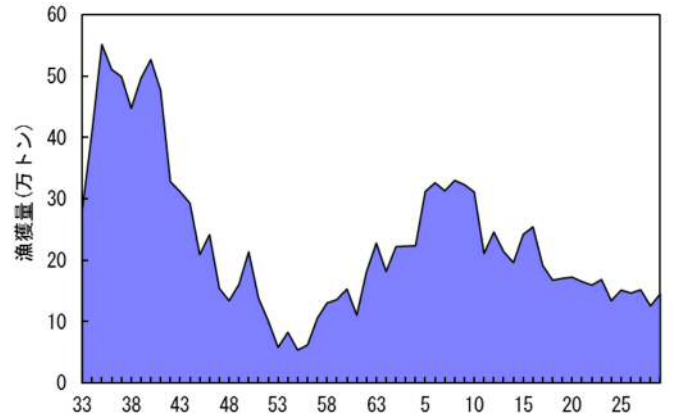


図 全国のマアジ漁獲量の推移

年

2. 県内の令和元（2019）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甌島周辺、長島（内海）でマアジ小、豆（0～2歳魚：2017～2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では、立目崎沖でマアジ豆、小（0～2歳魚：2017～2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で153トンの水揚げで、前年の61%及び平年の39%と低調な漁獲となりました。

3. 県内の令和元（2019）年7～9月期の見とおし

漁獲の主体はマアジ豆、小（0～2歳魚：2017～2019年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年・平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターン等から予測しました。

来遊量は、直近の漁獲動向から予測しました。前期（4～6月）と今期（7～9月）の漁獲量にはやや相関がありますが、2018年12月以降、マアジの漁獲量は非常に低調に推移しており、今期の来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

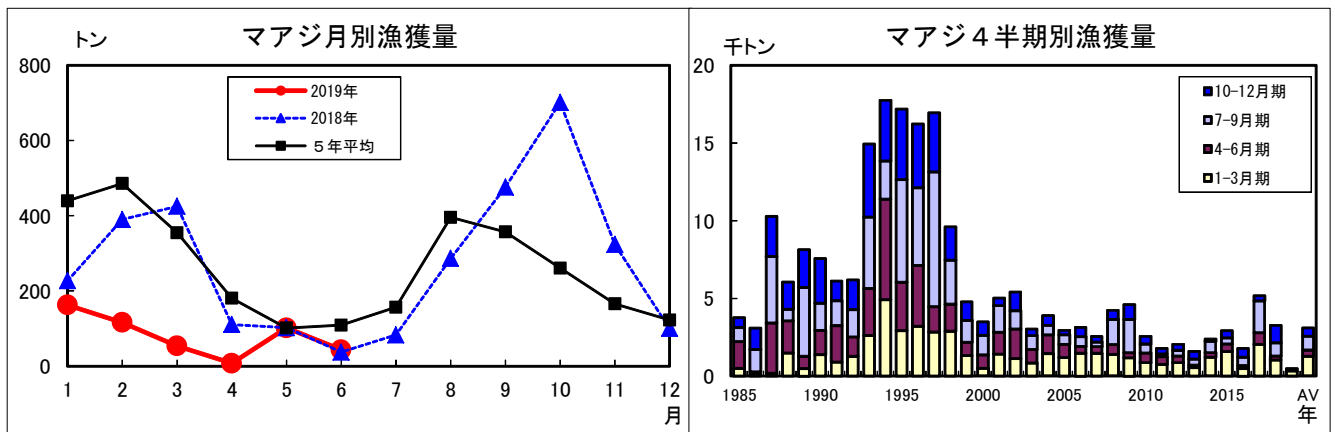


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和元（2019）年6月26日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成29年は51万8千トンとなりました。

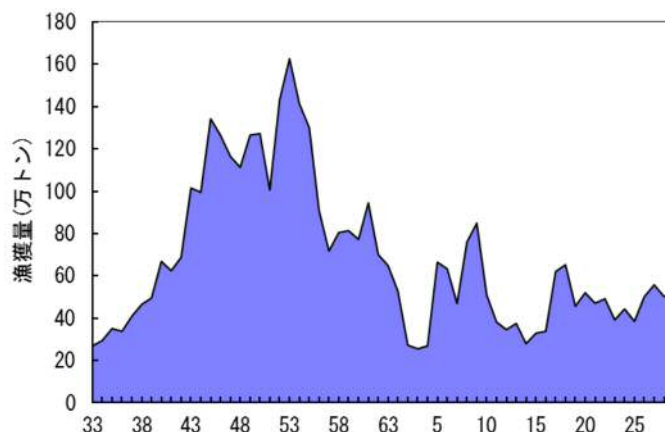


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 県内の令和元（2019）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、4、6月に宇治でサバ類中（3～6歳魚：2013～2016年生まれ）主体の漁場が形成されました。5月に甑島周辺でサバ類中、小（1～5歳魚：2014～2018年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、4、5月に黒島、野間池沖でマサバ中小、中（4～6歳魚：2013～2015年生まれ）主体の漁場が形成されました。期を通じて馬毛島、湯瀬、屋久島南でゴマサバ中（3～6歳魚：2013～2016年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で7,020トンの水揚げで、前年の145%及び平年の137%となりました。

3. 県内の令和元（2019）年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中（3～6歳魚：2013～2016年生まれ）、ゴマサバ豆（0,1歳魚：2018, 2019年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年を下回り、平年並でしょう。

（根拠）

今期は、成魚であるゴマサバ3～6歳魚に加え、新規加入群である0,1歳魚が漁獲の主体になります。前期（4～6月）は前年・平年を上回る漁獲量となりましたが、これは3月に続き4月にもマサバのまとまった漁場形成があったためです。今期はマサバの漁獲は少なく、ゴマサバ主体になると考えられることから、今期の来遊量は好調であった前年を下回り、平年並であると考えられます。

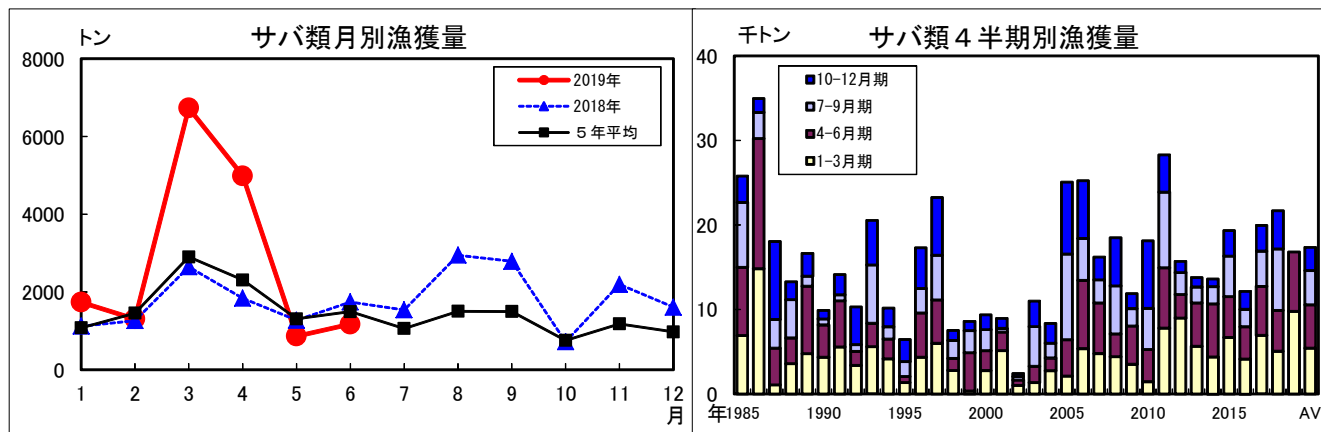


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和元（2019）年6月26日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14から22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成29年には50万トンとなりました。

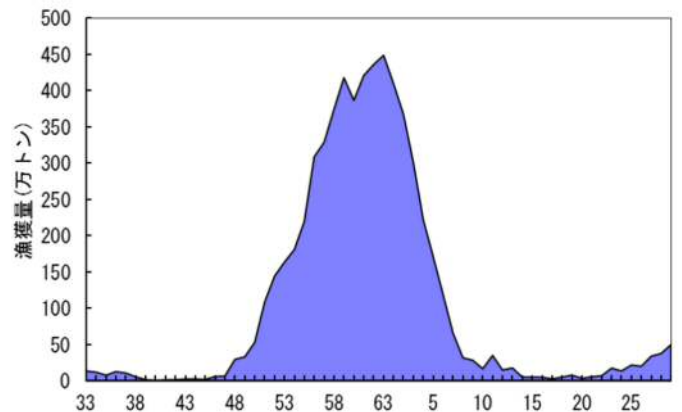


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の令和元（2019）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域、薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網、北薩海域の棒受網では、水揚げはありませんでした。

3. 県内の令和元（2019）年7～9月期の見とおし

来遊は前年と同様見込めず、平年を下回るでしょう。

（根拠）

前年から引き続きまとまった漁場形成がないこと、調査において本種の卵稚仔の採取がまったく見られなかったことを考慮し、来遊が前年と同様見込めないと考えられます。

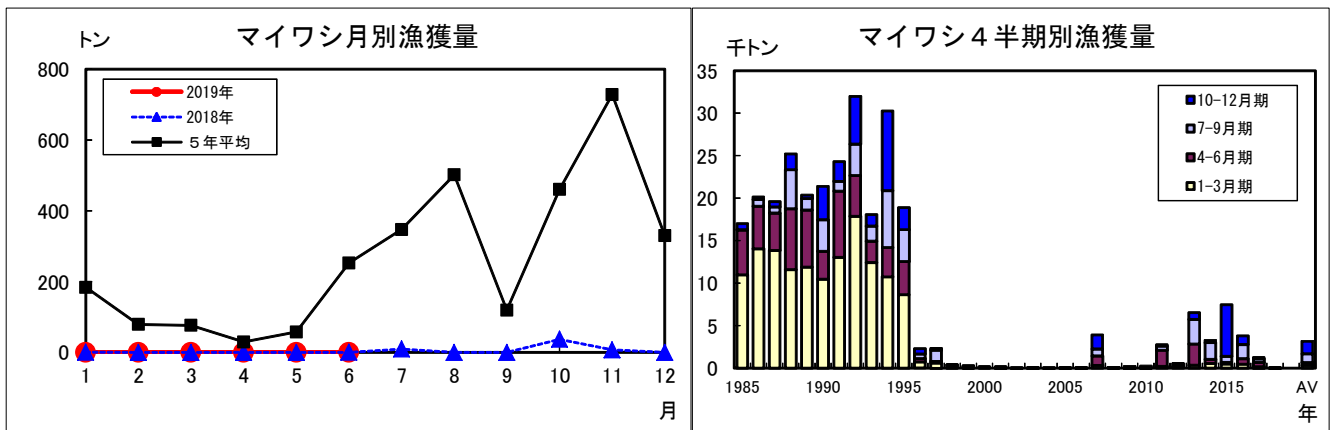


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和元(2019)年6月26日までの水揚量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となり、平成29年は7万2千トンと減少したものの、高い水準を維持しています。

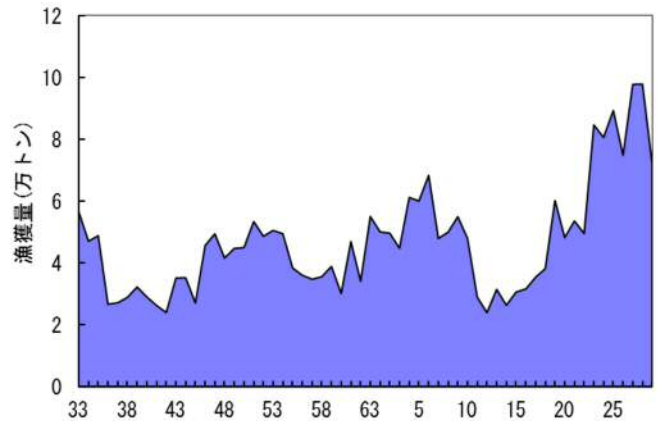


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

年

2. 県内の令和元（2019）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、5月に甌島周辺、6月に串木野沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、6月に野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、274 トンの水揚げで、前年の120％、平年の32％でした。

北薩海域の棒受網では、小羽（0歳魚：2019年生まれ）主体に58 トンの水揚げで、前年の40％、平年の43％でした。

3. 県内の令和元（2019）年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、小～中羽（0歳魚：2019年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を上回り、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚（2019年生まれ）は、前期の漁獲が低調であった前年を上回っていることから前年は上回るが、平年は下回ると考えられます。

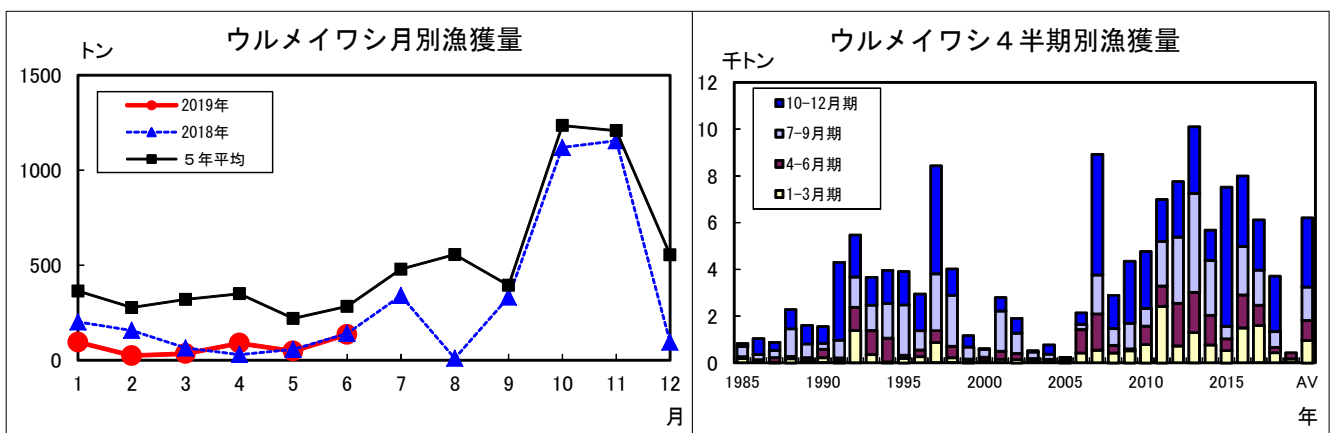


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和元（2019）年6月26日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成29年は14万6千トンとなりました。

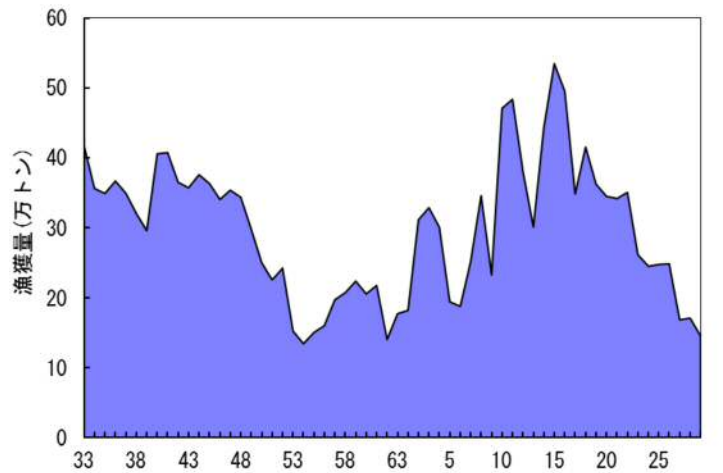


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和元（2019）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甌島周辺、長島（内海）で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：2018年生まれ）主体に1059トンの水揚げで、前年の115%，平年の91%でした。

北薩海域の棒受網では、長島（内海）で漁場が形成され、204トンの水揚げで、前年の78%，平年の67%でした。

3. 県内の令和元（2019）年7～9月期の見とおし

獲の主体は、中羽～大羽（1歳魚：2018年生まれ）に小羽（0歳魚：2019年生まれ）が混じるでしょう

来遊量は前年を上回り、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

来遊量については、前期に卵や稚仔魚が平年を上回って出現しており、良好な加入が期待できるものの、6月の漁獲量は平年を下回っており6月と7～9月の漁獲量に正の相関があることから、低調であった前年は上回るが、平年は下回ると考えられます。

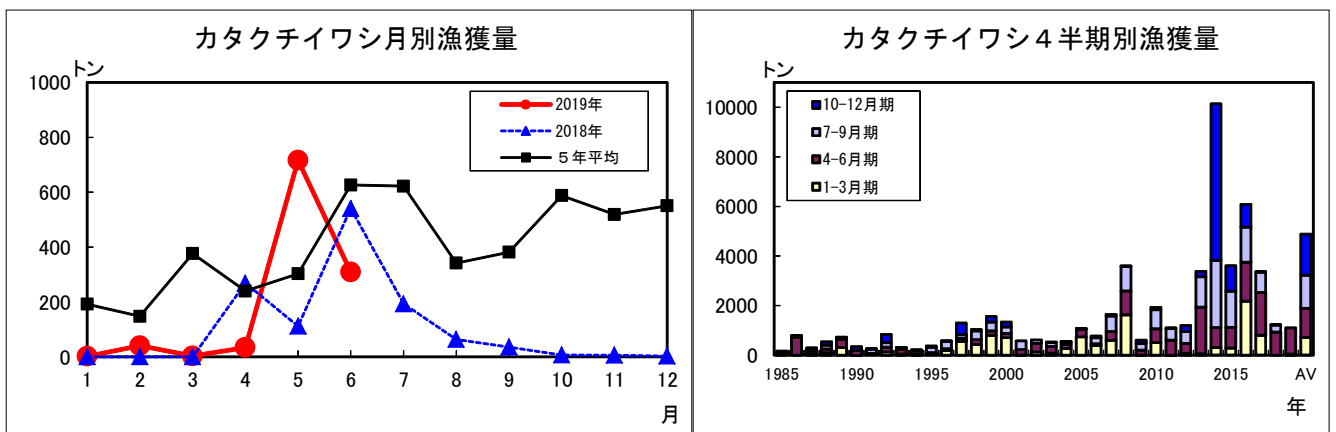


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和元（2019）年6月26日までの水揚量を使用

[シラス]

1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では、平成 11 年の 5,450 トンをピークに減少傾向を示し、平成 14, 15 年と 1,000 トンを下回り低調に推移しました。その後、平成 16 年は 3,507 トンと比較的好調に推移しましたが、平成 17 年以降減少傾向を示し、平成 30 年は 1,551 トンとなりました。

志布志湾海域では、平成 19 年まで増加傾向を示しましたが、その後、1,000 トン前後で増減を繰り返しながら推移し、平成 30 年は 956 トンとなりました。

2. 令和元（2019）年春漁（3～5月期）の漁況の経過

西薩海域では、カタクチシラス主体に 116 トンの水揚げで、前年の 18 %、平年の 19 % でした。

志布志湾海域では、カタクチシラス主体に 203 トンの水揚げで、前年の 47 %、平年の 80 % でした。

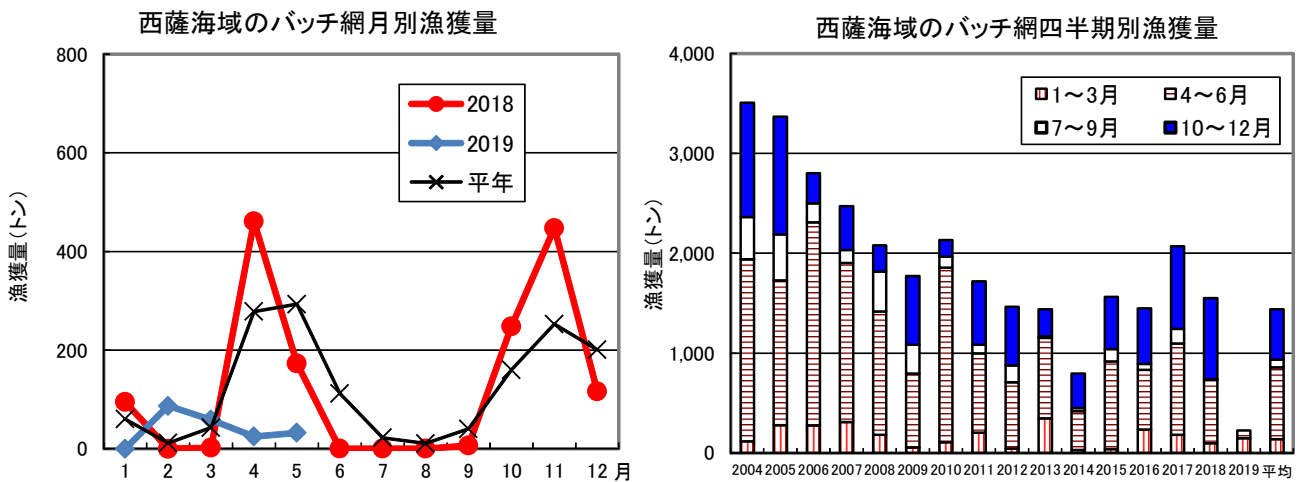


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4 漁協計)

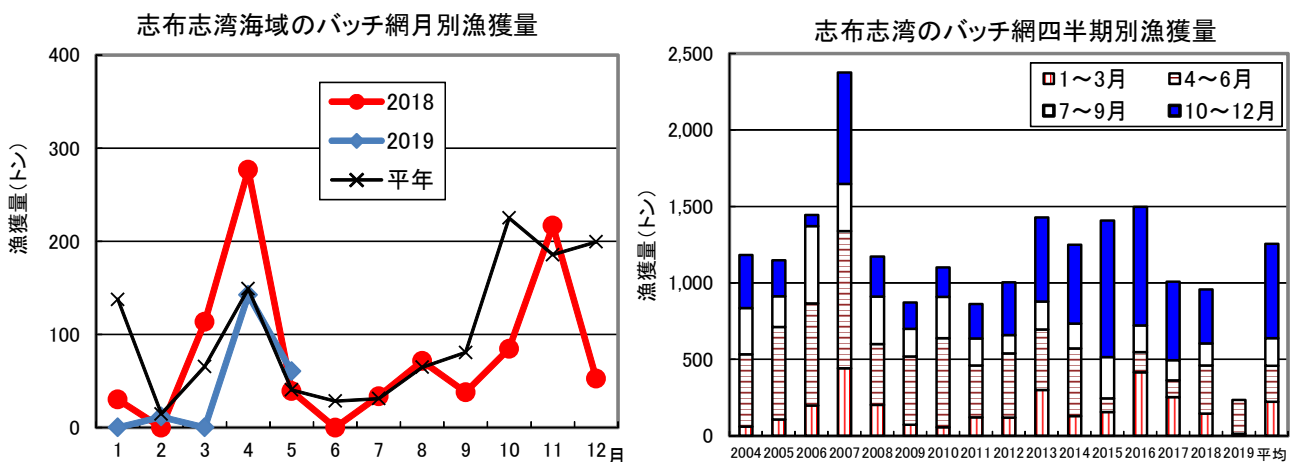


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2 漁協計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)、令和元（2019）年 5 月 31 日までの水揚げを使用

[イワシ類参考資料]

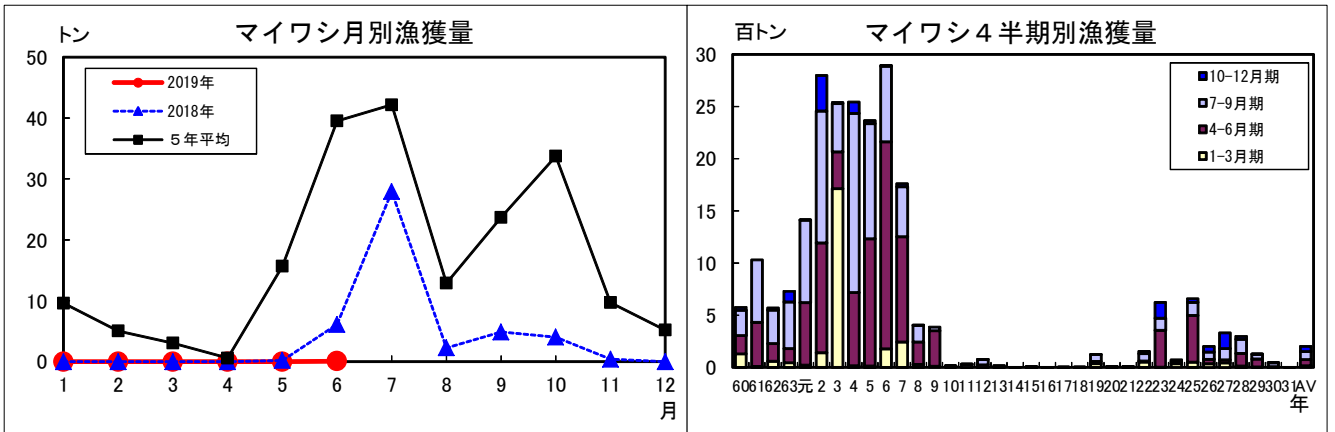


図 マイワシ棒受網漁獲量変化 (阿久根港)

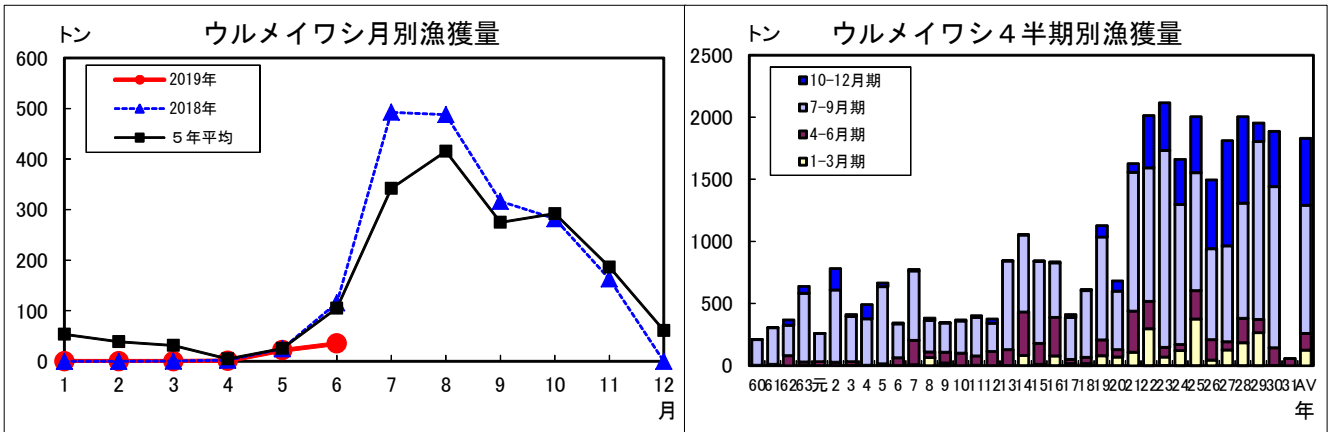


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化 (阿久根港)

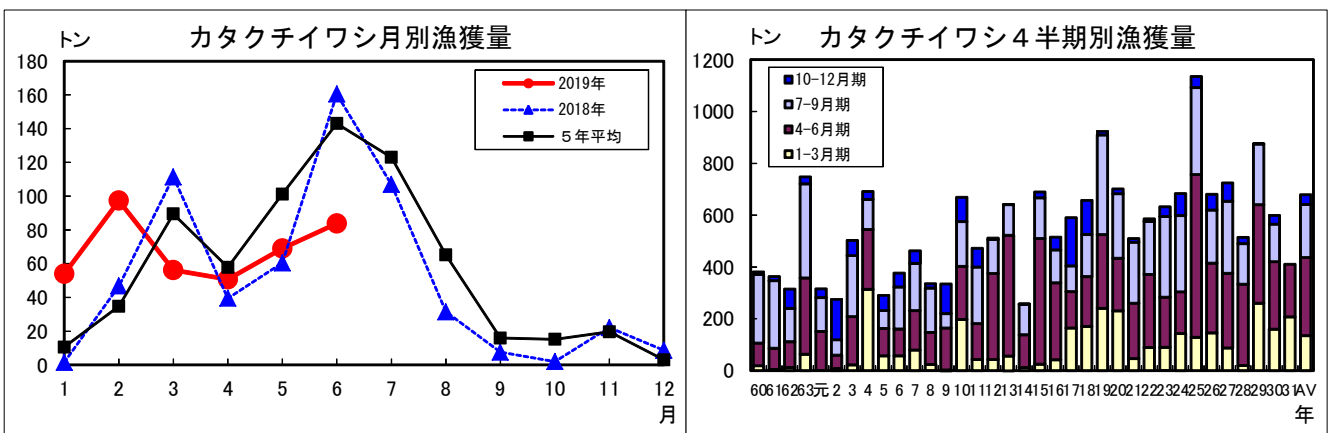


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化 (阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 令和元(2019)年6月26日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ，モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和元（2019）年4～6月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は，平成2年の21,700トンをピークに急減し，平成6年以降は，1,500トンから5,000トンの中での推移しており，平成30年は2,114トンとなりました。

4港計のまき網では，屋久新，宇治でクサヤモロ中小，中主体の漁場が形成されました。期全体で147トンの水揚げで，前年の75%及び平年の45%でした。

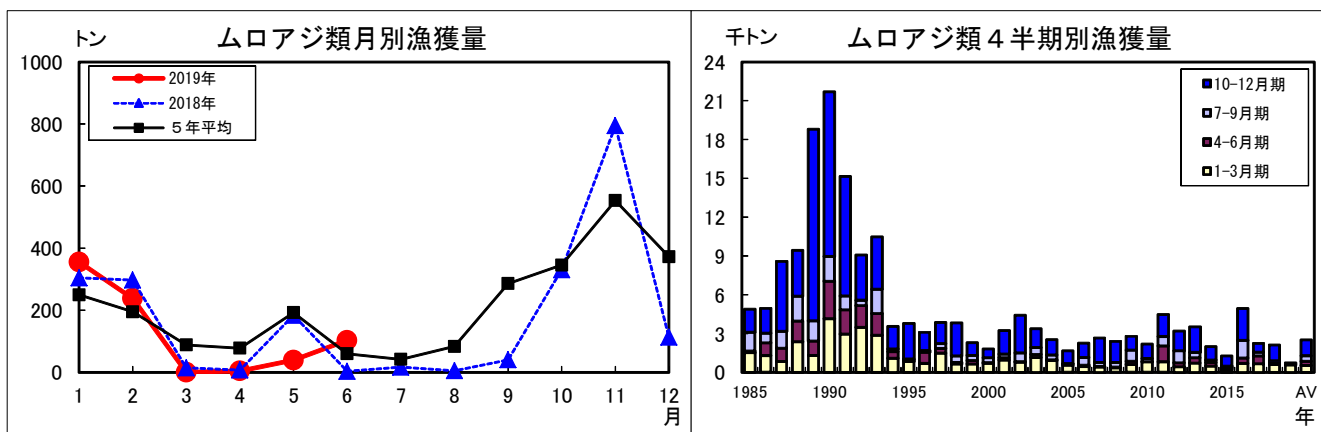


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和元（2019）年6月26日までの水揚量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和元（2019）年4～6月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は，平成元年の5,300トンをピークに一旦減少し，平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが，平成30年は1,025トンとなりました。

4港計のまき網では，屋久島南，種子島北で中小，小主体の漁場が形成されました。期全体で202トンの水揚げで，前年の77%及び平年の46%でした。

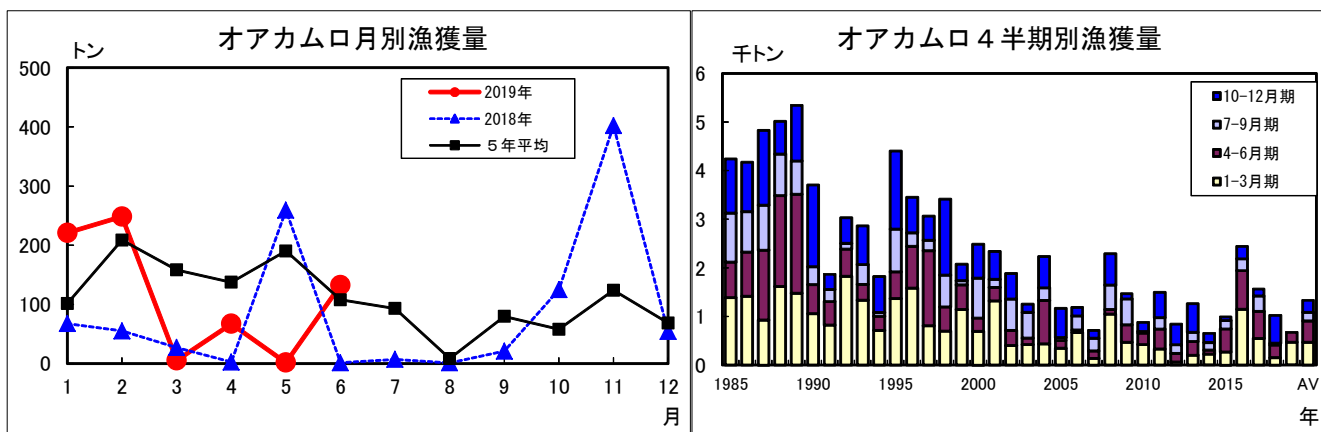


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和元（2019）年6月26日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和元（2019）年4～6月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しましたが、平成16年以降は低調に推移し、平成30年は347トンとなりました。

4港計のまき網では、八代海、野間池沖で中、小主体の漁場が形成されました。期全体で81トンの水揚げで、前年の229%及び平年の125%でした。

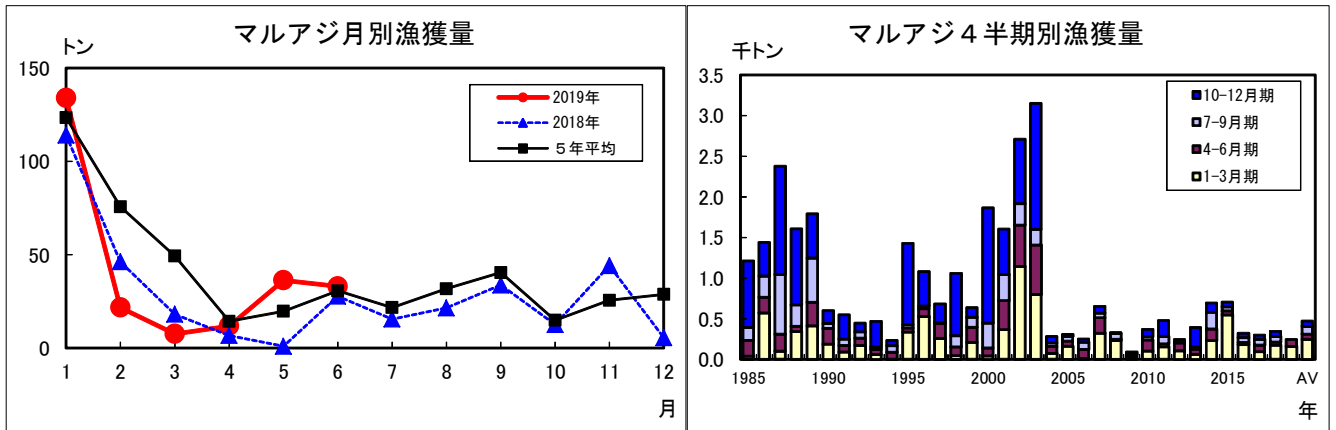


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和元（2019）年6月26日までの水揚量を使用